

校内研究への支援

—校内研究は子供の成長のため—

Support for School Research

石鍋 浩

ISHINABE Hiroshi

要 約

毎年、東京都内をはじめとする小中学校数校から、校内研究会（校内研修）で話をしてほしいと声をかけていただいている。校内研究の進め方や研究主題の捉え方、研究発表の方法・内容などについて、国の考え方や有識者の考え方に私の学校現場や教育行政での経験を加えてアドバイスさせていただいている。本稿では、その一部を紹介する。校長先生、副校長先生、教頭先生や研究主任をはじめとしたミドルリーダーの先生方にとって、参考にしていただけたら幸いである。

はじめに

区市の教育委員会では、教育課題の解決を図るために、研究校（名称は、研究指定校、研究協力校、パイロット校等、地域によってさまざまである）を定め、学校全体で研究主題を設定し課題解決に向けて校内研究を進めている。研究校の役割には、研究成果を地域内の学校に広く周知し、地域全体の教育力向上に資することがあげられる。また、研究校に指定はされていないが、当該校の教育課題の解決のために、校内研究・校内研修を学校経営の核に据えている学校は数多くある。

私は、大学に勤務してからの6年間で、毎年、東京都内をはじめとする小中学校数校の校内研究・校内研修（以下、「校内研究」とする）に携わらせていただいた。それぞれの学校に複数回継続して訪問するので、毎年10回以上は校内研究（校内研修）に伺っていることになる。ここに、校内研究でアドバイスさせていただいている内容の一部を紹介する。

1 研究のための研究にしない

私は校内研究で学校に伺った際に、最初に話をさせていただくことは、「校内研究を研究のための研究にしない」ということである。特に、研究発表を求められている研究校の場合、研究発表会をゴールと考え、研究発表会を成功させるにはどうしたらよいかばかりに焦点がいきってしまい、日々の取

研究と授業改善

- 研究のための研究にしない！
児童・生徒の成長のため
- 研究も授業改善も
児童・生徒を成長させる
ための手段・方法



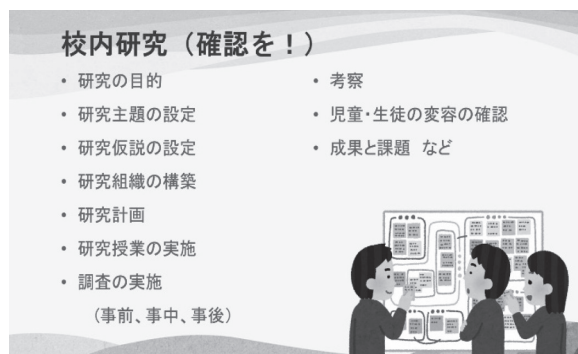
組の地道な積み重ねの重要性を見失ってしまう場合がある。研究発表はゴールではなく、児童・生徒の成長を促すためのあくまで通過点に過ぎないと強調している。学校現場における実践的な研究は、「児童・生徒の成長のための日々の取組の積み重ね」であるとも伝えている。研究や授業改善は、児童・生徒を成長させるための手段・方法であることを忘れてはならない。

2 校内研究で押さえないこと

(1) 確認事項

校内研究のスタート時点で右のスライドに示すような項目について確認している。校内研究の全体像を学校全体で共有することは、組織として研究に取り組んでいく上でとても重要であることは言うまでもない。

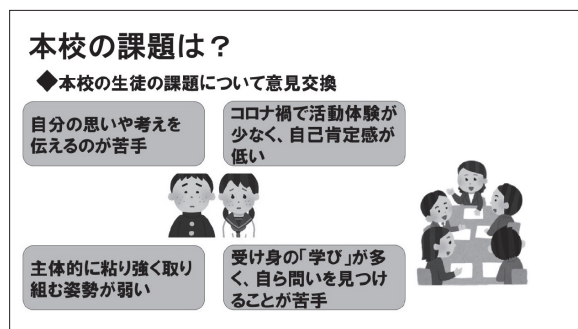
また、「児童・生徒の変容」をどのように捉えるかは、研究の核となるので、校内で十分に議論をしてほしいと伝えている。



(2) 児童・生徒の成長に結び付けるための第一歩

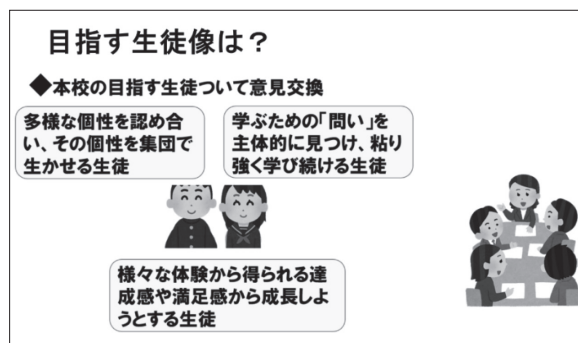
研究を進めるにあたって、「本校の課題」「目指す児童・生徒像」「保護者・地域の期待」を明らかにしてから研究を進めてほしいと伝えている。本校の課題を分析することにより、目指す児童・生徒像が明確になり、研究方法・内容と児童・生徒の成長する姿に結び付けていく。

右のスライドは、〇中学校において、先生方が課題を整理し、そこから導き出した「目指す生徒像」を示したものである。

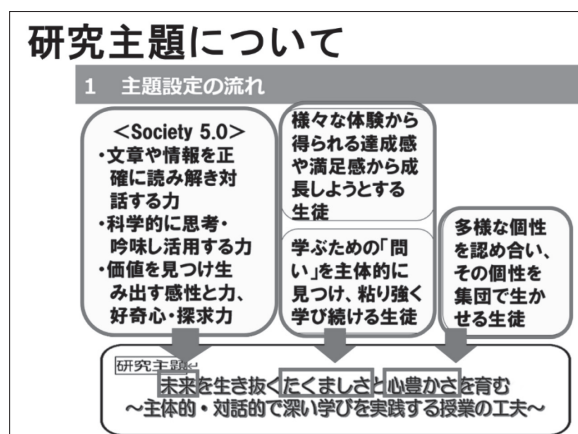


(3) 研究主題

研究主題を「未来を生き抜くたくましさ」と心豊かさを育む」と設定した〇中学校を例に考えてみる。研究主題にある「未来を生き抜くたくましさ」とはどういうものか？また、それがなぜ必要なのか？「未来を生き抜く心豊かさ」とはどういうものか？また、それがなぜ必要なのか？について十分に議論してもらった。研究主題についてのイメージを共有し、各教員が授業をはじめ教育活動で具体的な実践につなげていくことが重要であると考えたからである。



右の図は、〇中学校が社会情勢や目指す生徒像を基に



して研究主題を設定した流れを示している。

3 学校全体としての取組

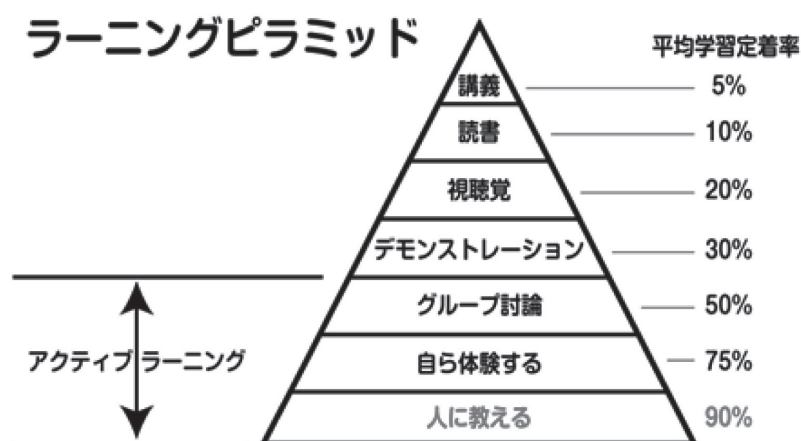
学校におけるカリキュラム・マネジメントに求められている考え方は、校内研究を進めていくうえで欠かすことができない。次のような学校全体としての取組について確認しながら校内研究の進め方をアドバイスしている。

- ① 校長を中心としつつ、教科等の縦割りや学年を越えて、学校全体で取り組んでいくことができるよう、学校の組織及び運営についても見直しを図る。
- ② 管理職のみならず全ての教職員がその必要性を理解し、日々の授業等についても、教育課程全体の中での位置付けを意識しながら取り組む。
- ③ 学習指導要領等を豊かに読み取りながら、各学校の子供たちの姿や地域の実情等と指導内容を照らし合わせ、効果的な年間指導計画等の在り方や、授業時間や週時程の在り方等について、校内研修等を通じて研究を重ねていく。

校内研究が研究主任や研究部によってのみ進められている学校も一部に見られるが、児童・生徒の成長のために研究をするのであれば、学校全体での取組が必須であることは言うまでもない。

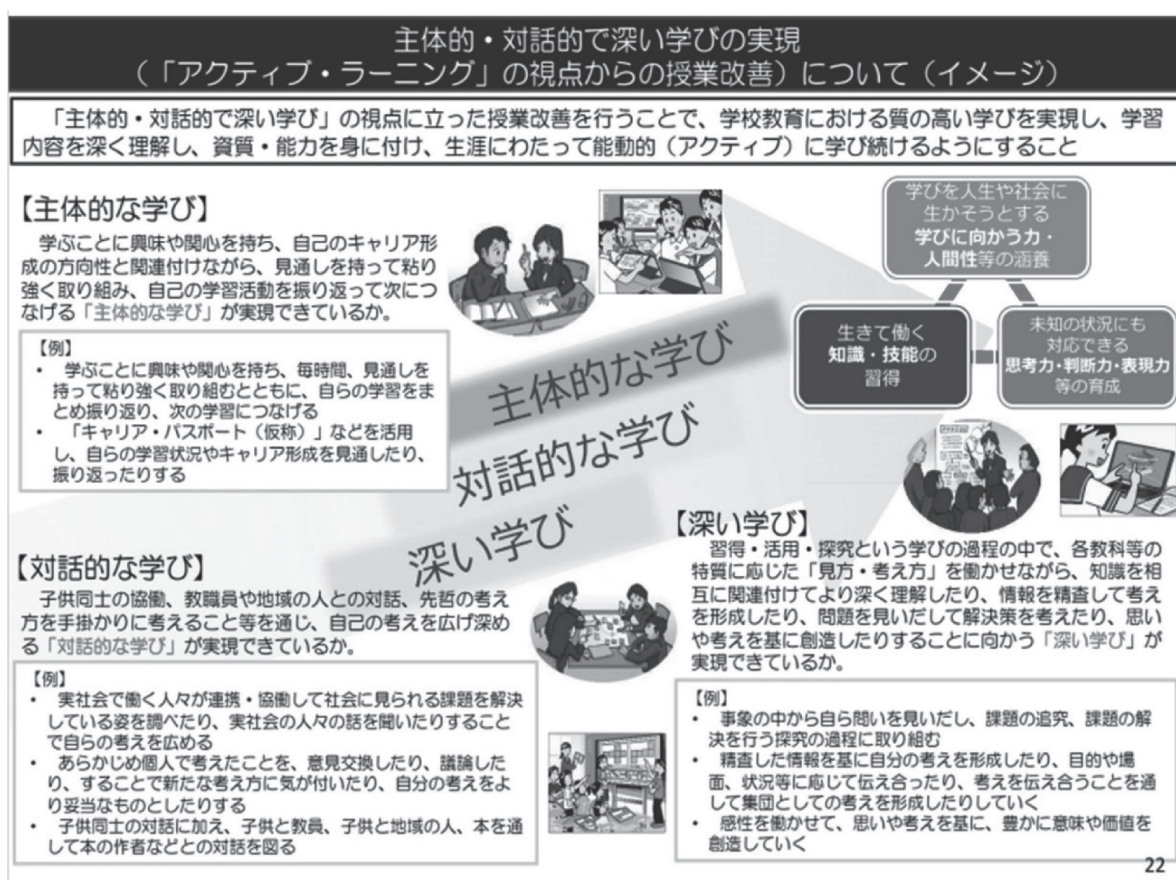
4 主体的・対話的で深い学び

最近の校内研究では、「主体的・対話的で深い学び」に焦点を当てた研究が増えている。そこで、まず、アメリカ国立訓練研究所（National Training Laboratories）の研究によって導き出された学習定着率を表す「ラーニングピラミッド（Learning Pyramid）」を用いて、これからの学校教育に求められている「アクティブラーニング」「主体的・対話的で深い学び」について説明している。より能動的・主体的な学習になるほど学習定着率や教育効果が高いと伝え、授業改善の方向性について考えてもらっている。



出典：The Learning Pyramid National Training Laboratories

次に、文科省の次の図を紹介し、「主体的・対話的で深い学び」の全体像を理解してもらうようにしている。



続いて、以下のア～カを必ず確認することにしてている。

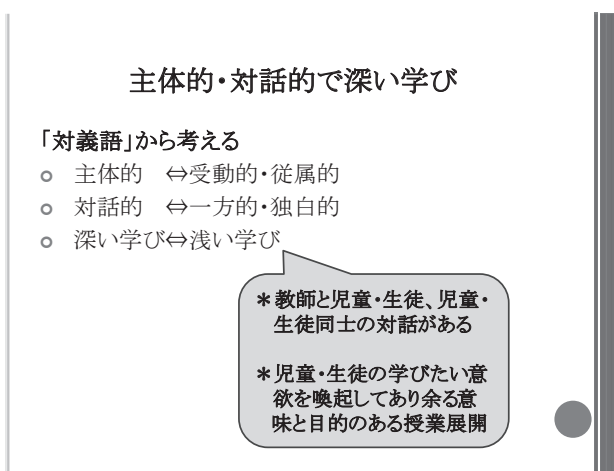
- ア 義務教育段階はこれまで地道に取り組み蓄積されてきた実践を否定し、全く異なる指導方法を導入しなければならないと捉える必要はない。
- イ 授業の方法や技術の改善のみを意図するのではなく、児童生徒に目指す資質・能力を育むために「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点で、授業改善を進めるものである。
- ウ 各教科等において通常行われている学習活動（言語活動、観察・実験、問題解決的な学習など）の質を向上させることを主眼とする。
- エ 単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見直し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものである。
- オ 「深い学び」の鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になる。児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められる。
- カ 基礎的・基本的な知識及び技能の習得に課題がある場合には、その確実な習得を図ることを重視する。

学校現場では、「主体的・対話的で深い学び」を全く新しいものとして捉え、今までの教育活動を一から考

え直そうとして行き詰まっているケースも見受けられる。そこで上記アとウについては特に強調することになっている。

授業改善を1単位時間の授業の中でのみ考えている教員が少なからずいるので、上記エの「単元や題材など内容や時間のまとまり」を大切にしてほしいということも伝えている。

また、上智大学教授の和泉伸一先生の考えを参考に、「主体的・対話的で深い学び」は「対義語」から考えるとわかりやすくなると説明している。



対義語の「受動的」とは、自分の意思で考えたり、学んだりするのではなく、言われたままに従うこと。「一方的」とは、双方向の語り合いでなく、一方が延々と説明したり話したりする状況。「浅い学び」とは、意味や目的を考えずに機械的作業に終始する学び、暗記すればどうにかなる学びのことであると説明を加えている。

國學院大學教授の田村学先生の資料を参考に、「主体的な学び」の実現に必要な「見通し」をもつことと「振り返り」の重要性についても触れることにしている。特に、次の3つの意味について押さえている。

- ① 学習内容を確認する振り返り
- ② 学習内容を現在や過去の学習内容と関係づけたり、一般化したりする振り返り
- ③ 学習内容を自らとつなげ自己変容を自覚する振り返り

5 「深い学び」の鍵としての「見方・考え方」

前項4オの「見方・考え方」については、言葉では理解できるが、具体的にどのようなことなのかかわからないとの声を聞くことも多い。そこで、「令和2年 広島県教育資料」に掲載されている「各教科等における見方・考え方」の表を用いて、教科ごとに「見方・考え方」を具体化してもらっている。(以下は、表の一部抜粋である。)

各教科等における見方・考え方

教科等	見方・考え方
国語 「言葉による見方・考え方」	<p>【小・中学校】 言葉による見方・考え方を働かせるとは、児童（生徒）が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること <根拠：小〔中〕学校学習指導要領解説 国語編></p>
社会 「社会的な見方・考え方」	<p>【小学校】 ・社会的事象の見方・考え方 社会的事象を、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係に着目して捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること <根拠：小学校学習指導要領解説 社会編></p> <p>【中学校】 ・社会的事象の地理的な見方・考え方（地理的分野） 社会的事象を、位置や空間的な広がりに着目して捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付けること ・社会的事象の歴史的な見方・考え方（歴史的分野） 社会的事象を、時期、推移などに着目して捉え、類似や差違などを明確にし、事象同士を因果関係などで関連付けること ・現代社会の見方・考え方（公民的分野） 社会的事象を、政治、法、経済などに関わる多様な視点（概念や理論など）に着目して捉え、よりよい社会の構築に向けて、課題解決のための選択・判断に資する概念や理論などと関連付けること <根拠：中学校学習指導要領解説 社会編></p>
算数 数学 「数学的な見方・考え方」	<p>【小学校】 事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、根拠を基に筋道を立てて考え、統合的・発展的に考えること <根拠：小学校学習指導要領解説 算数編></p> <p>【中学校】 事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、論理的、統合的・発展的に考えること <根拠：中学校学習指導要領解説 数学編></p>

6 主体的に学習に取り組む態度の評価

学習評価についての課題として、従来の「関心・意欲・態度」の観点について「学校や教師の状況によっては、挙手の回数や毎時間ノートを取っているかなど、性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉える評価であるような誤解が払拭し切れていない」ということが指摘されている。これを受け、従来から重視されてきた各教科等の学習内容に関心をもつことのみならず、よりよく学ぼうとする意欲をもって学習に取り組む態度を評価するという趣旨が改めて強調されている。

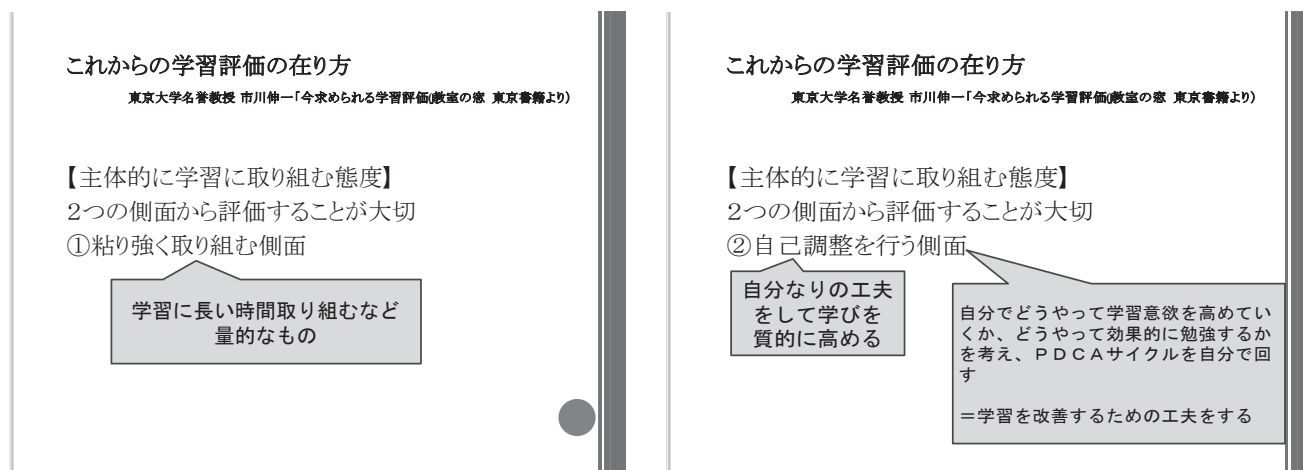
学校現場からも「主体的に学習に取り組む態度」の評価について詳しく知りたいという声も多く出ている。

校内研究では、「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、2つの側面から評価することが大切であるとアドバイスしている。

一つめは、「粘り強く取り組む側面」、二つめは「自己調整を行う側面」である。

特に、「主体的・対話的で深い学び」については、単に継続的な行動や積極的な発言を行うなど、性格や行動面の傾向を評価するというのではなく、各教科等の「主体的に学習に取り組む態度」に係る観点の趣旨に

照らして、知識及び技能を習得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価することが重要であると説明している。



校内研究への支援では、「校内研究は子供たちの成長のために行う」というメッセージに加え、先生方とのやり取りを通して、「先生方のモチベーションを上げていく」ことに注力している。先生方は言うまでもなく教育のプロである。先生方個人そして組織のモチベーションが上がれば、校内研究の内容や方法のアイデアが数多く出され、校内研究がさらに充実し、子供たちを大きく成長させてくれると信じている。

【参考文献】

- ・中学校学習指導要領（文部科学省）
- ・中学習指導要領解説総則編（文部科学省）
- ・「やり取り」と「英語で授業」で深い学びを実現（東京書籍 上智大学教授 和泉伸一）
- ・「児童生徒の学習在り方について（報告）」（文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会）
- ・学習評価の在り方ハンドブック（小・中学校編）（国立教育政策研究所教育課程研究センター）
- ・「今求められる学習評価」（教室の窓 東京書籍 東京大学名誉教授 市川伸一）
- ・「学習評価についての資料」（國學院大学教授 田村学）